

山形・鶴ヶ岡城跡

つるがおかじょう

1 所在地 山形県鶴岡市馬場町

2 調査期間 一 第一次調査 一九九九年(平11)七月～十二月、二 第二次調査 二〇〇〇年四月～十一月

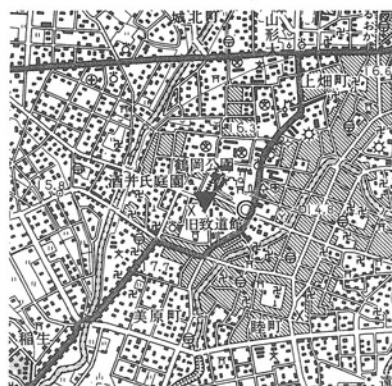
3 発掘機関 (財)山形県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 菅原哲文

5 遺跡の種類 城館跡

6 遺跡の年代 平安時代・中世～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(鶴 岡)

鶴ヶ岡城跡は、庄内平野の南西に位置する鶴岡市に所在し、市街を流れる赤川左岸の微高地に立地する。城は本丸・二の丸・三の丸と、各郭の外周をめぐる堀と土塁を備える輪郭式平城である。中世には大宝寺城と称され、室町時代初期に大泉荘の地頭であった武藤長盛によって築城されたと伝えられる。

天正一五年(一五八七)に武藤氏が滅亡し、上杉氏と最上氏の領土争いや関ヶ原の戦を経て、慶長六年(一六〇一)に最上義光が城主となった。この時、城名を鶴ヶ岡城に改めた。元和八年(一六二二)に最上氏が改易され、信州松代より酒井忠勝が入部して以後、江戸時代を通じて酒井氏が代々城主であった。現存する土塁と堀は、酒井氏入部の後に整備されたものとされる。一八七五年に廃城となった。

調査は、東北公益文科大学新築事業に伴い実施された。第一次調査では、二の丸堀跡(一区)、二の丸土塁の一部(二区)、百間堀跡(三区)、絵図面での松原地点(四区)の合計五一四五㎡を調査した。第二次調査では、引き続き二の丸土塁部分(二区E・W・S・Tゾーン)、松原から百間堀跡にかかる地点(五区)、二の丸堀跡(六・七・九区)、二の丸郭内(八・一〇区)の合計六一〇〇㎡を調査した。

二の丸堀跡からは、廃城の際に廃棄された板材、漆器・下駄・曲物などの木製品、中・近世の陶磁器、瓦などが出土した。二の丸土塁では、土留め施設の杭列と石積み、ほぼ全周にわたって施されていたことが明らかとなった。二の丸郭内では、近世と考えられる礎石建物と、その下層に、酒井氏入部以前の遺構面が二面から三面存在することが確認された。松原地点では、近世の掘立柱建物や井戸を検出し、家臣の屋敷地と推定される。

次に、木簡などの文字資料の出土遺構について述べる。SD一

(二の丸堀跡) は江戸時代の構築であり、覆土は四層に大別される。一層は廃城時の堆積層、二～四層は江戸時代の堆積層と考えられる。墨書や刻書が認められる木製品が、覆土一層から二点(一(1)(2)、覆土三層から一点(二(1))、計三点出土した。一区SK一七土坑は、二の丸堀と百間堀との間の中土手に位置し、五点の漆器が出土した。そのうちの一点に文字が記されていた(二(4))。一区からは、この他に出土地点・層位不明の一点がある(一(3))。四区井戸SE一九からは、二点の漆器と挽物皿が出土し、このうちの漆器碗一点に文字らしき漆痕があった(一(5))。五区のSD三(百間堀跡)では、木簡状の木製品が一点出土したが、文字は認められなかった。この区の百間堀跡に近接する土層からは木製品の出土が多く、二(2)は江戸時代の遺物包含層であるⅢ層から、二(3)は、その上層の明治期のⅡ層から出土した。

8 木簡の积文・内容

一 第一次調査

一区SD一覆土一層

- (1) 御カ
墨入
 183×77×3 061

- (2) 「三月十七
 仟」(刻書)
 86×86×6 061

一区出土地点・層位不明

- (3) 二カ
二
 径(120)×高(50) 061

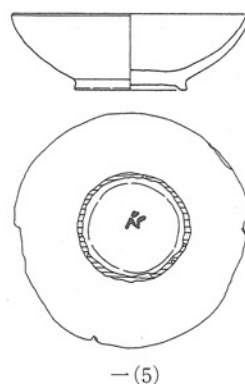
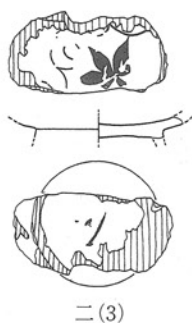
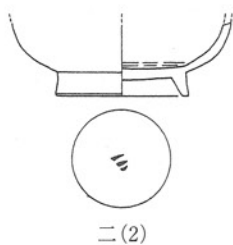
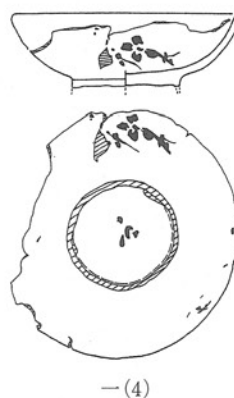
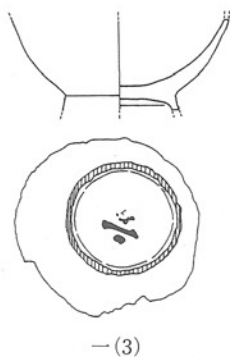
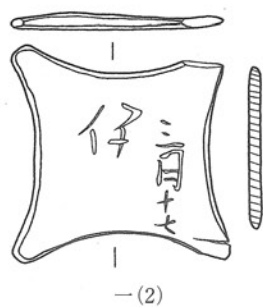
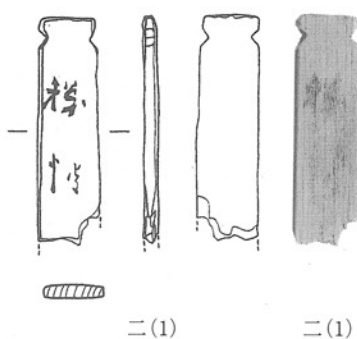
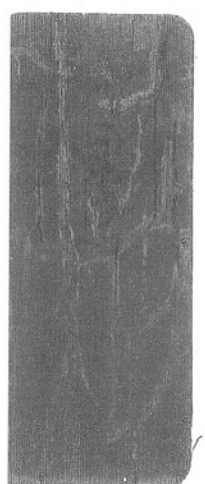
一区SK一七

- (4) 三カ
二
 径(127)×高42 061

四区SE一九

- (5) 二
 径132×高43 061

(1) は箱物の底板と思われる、縁辺に竹釘の痕が一〇カ所認められる。文字の左右両端にも墨痕があるが、文字か模様か不明である。(2) は糸巻きである。刻線による文字が描かれている。左側の文字は、報告書では「仔カ」としたが、再検討の結果「仟」とした。(3) (5) は漆器碗である。(3) は外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗られ、文字は赤色漆で書かれる。(4) は外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗られ、赤色漆で梅花文と文字が書かれる。文字の一部は剝落している。(5) は内外面ともに黒色漆が施され、底面に赤色漆による文字あるいは文様と思われるものが認められる。



二 第二次調査

二区SD一覆土三層

(1) [V□□

(90)×24×5 039

五区遺物包含層Ⅲ層

(2) [11]

径(122)×壁(41) 061

五区遺物包含層Ⅱ層

(3) [11]

径(90)×壁(14) 061

(1)は付札で、下端を欠損する。(2)は漆器椀で、内外面ともに黒色漆が施され、赤色漆による文字がある。(3)は漆器皿で、内外面ともに黒色漆が施され、赤色漆による花文と文字がある。

なお、木簡の釈読にあたっては、山形県立米沢女子短期大学の吉田敏氏のご教示をいただいた。

9 関係文献

〔財〕山形県埋蔵文化財センター『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』(二

〇〇二年)

(菅原哲文)

木簡画像データベース「木簡字典」の公開

奈良文化財研究所では二〇〇五年二月、木簡画像データベース「木簡字典」を公開した。これは木簡の文字の画像を一文書毎に検索でき、しかもさまざまな条件による絞り込みが可能な画期的なシステムである。画像もモノクロだけでなく、カラー、赤外線などさまざまなタイプの複数の画像が選択できる。また、木簡の文字を読んだ記録である記帳ノートも公開している。さらに、その画像の文字が書かれた木簡の基礎データを参照でき、どの木簡のどういう文脈で用いられた文字かがわかる。

現在、奈良文化財研究所が調査した木簡だけでなく、九州歴史資料館のご協力によって大宰府跡出土木簡も含め、約六〇〇字種、約六三〇〇文字分のデータを収録している。データの拡充(絶対量・時代・遺跡)、熟語(複数文字)検索、釈読支援システムのうちの位置付けなど課題も多いが、木簡を読み、資料として活用していく上で不可欠の工具となることが期待される(なお、このデータベースは、二〇〇三―〇七年度〈予定〉日本学術振興会の科学研究費補助金基盤研究(S)「推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」〈研究代表者渡辺晃宏〉の研究成果の一部である)。

URL: <http://www.nabunken.go.jp/database/>